

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：27601

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12925

研究課題名（和文）行為者性概念の再構築 ヘーゲル実践哲学からのアプローチ

研究課題名（英文）Rethinking the Concept of Agency: From Hegelian Point of View

研究代表者

川瀬 和也（Kazuya, Kawase）

宮崎公立大学・人文学部・准教授

研究者番号：90738022

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題においては、ヘーゲル哲学と現代の行為の哲学の両面から、行為者性の理論を構築に寄与することをめざした。

ヘーゲル哲学研究の面では、『精神現象学』における教養論・疎外論に、現代の自律的行為者の理論とつながる側面が見出せると示したことが最大の成果である。これに加えて、ロバート・ブランドムの推論主義的なヘーゲル解釈における相互承認の役割を解明した。

現代行為論研究の面からは、行為者性の理論が自律性の理論と深く結びついていることを明らかにした。自律論のうち、特に影響力の大きい階層説の代表的な理論について、その問題点を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本の哲学研究においては、20世紀後半に展開されたドナルド・デイヴィドソンやエリザベス・アンスコムらの行為の哲学が盛んに研究されてきたが、2000年代以降に大きく発展した自律を中心とする哲学研究については受容が遅れていた。本研究は、自律論に基づく行為者性の理論を検討することで、日本における行為者性の理論受容に貢献した。

また、ヘーゲルの疎外論は国際的にみても、単なる行為者性の欠如とみなされる傾向があった。本研究は疎外が自律にとって不可欠な要素を含むことを指摘し、国際的なヘーゲル研究の発展に貢献した。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I aimed to contribute to the construction of a theory of agency in terms of both Hegelian philosophy and contemporary philosophy of action.

In terms of research on Hegel's philosophy, I revealed that Hegelian theories of culture and alienation in the Phenomenology of Spirit can be connected to the contemporary theory of the autonomous agent. In addition to this, I elucidated the role of mutual recognition in Robert Brandom's inferentialist interpretation of Hegel.

In terms of contemporary philosophy of action, I have shown that the theory of agency is deeply connected to the theory of autonomy. Among the theories of autonomy, I pointed out the problems with the leading hierarchical theories of autonomy, which are particularly influential.

研究分野：哲学

キーワード：行為者性 ヘーゲル 自律性 行為の哲学 階層説 疎外 精神現象学

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、以下の二つの背景のもとに研究を計画した。

### (1) 行為者性の理論の発展

現代の英語圏の行為の哲学においては、行為者性と自律性に関わる問題が関心を集めている。

1970年代には、D. デイヴィッドソンの強い影響のもとで、行為の説明から「行為者」を消し去り、欲求や信念のような心的状態だけで行為を説明することが標準的であった。しかし、1980年代後半には、時間的な幅をもって行為をコントロールするためには、欲求と信念に還元されない行為者性が必要であるとする M. E. ブラットマンの「計画理論」が現れる。以後、行為者性の説明が行為の哲学の重要問題と見なされるようになった。

より最近になると、C. コースガードによる、実践的アイデンティティの構成という観点から、カント主義的に行為者性を説明しようとする研究が現れる。また、G. E. M. アンスコムの影響のもと、デイヴィッドソンやブラットマンと一線を画す、「新アンスコム主義」と言うべき研究が多く現れている。これらの研究において、行為者性は、自己知や自己意識との関係で論じられるようになっていく。カント主義的な行為論においても、新アンスコム主義的な行為論においても、行為者性の説明における一人称的な観点の重要性が強調されるようになっていく。

また、これとは別に、フェミニズム的な政治哲学の中から、「関係的自律性」として行為者性を捉え直そうという動きが生じている。

従来のフェミニズムの政治哲学は、自律的であることに価値があるという考え方そのものに批判的であった。自律的な行為者性を重視すると、社会においてすでに独立を勝ち得ている男性にとって都合の良い規範が再生産され、ケア的な関係のような「女性的」な価値が軽視されることになると考えられたからである。

しかし近年では、フェミニズム的な実践哲学において、女性やマイノリティの人々の自律の重要性が顧みられるようになってきている。このとき、旧来の自律概念に逆戻りするのではなく、関係の中で生きる人々の自律性・行為者性を捉えなければならないとされる。このため、現代のフェミニズム思潮においては、関係の中に埋め込まれた自律性の概念を新たに作り直す必要が生じている。

これらの研究を俯瞰すると、行為者性・自律性の一人称的な側面を重視する研究と、一人称的な側面に還元されない関係的な側面を重視する研究が同時に出現している状況が見て取れる。

### (2) ヘーゲル哲学への国際的な関心の高まり

国際的なヘーゲル哲学への関心は、アメリカでヘーゲル主義的なプラグマティズムを提唱する R. B. ブランドムや、ヘーゲルやシェリングの影響下にあつて「新実在論」を唱えるドイツの M. ガブリエルらの仕事によって、近年急速に高まっている。1990年代に始まったこのヘーゲルへの再評価は、一過性の流行ではなく、確固たるものとなりつつある。

行為の哲学の分野においても、C. テイラー以来、ヘーゲルの実践哲学を行為の哲学と結びつけて解釈しようとする伝統があつた。近年では、ドイツの M. クヴァンテと、アメリカの R. B. ピピンが、行為の哲学としてヘーゲルを読み直す研究を発表している。これらの研究により、ヘーゲルの実践哲学に行為の哲学としての側面があることは多くの研究者に認められている。同時に、ヘーゲルの実践哲学は、「相互承認」をキーワードに、J. ハーバーマスやホネットらによ

って社会哲学として再構成されてきた歴史があり、その重要性は広く認められている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、行為者性を説明する統一的な理論を構築することであった。行為者性概念に関する近年の有力な研究には、大きく分けて、一人称的な観点から行為者性を説明しようとする研究と、関係的自律性という概念を提唱し、社会の中で行為者性がどのように働くかを明らかにしようとする研究の二つの流派がある。本研究では、これら二つの流派における議論を俯瞰し、両者を調停する統一的な理論を構築することを目指した。

また、本研究においては、ヘーゲルの実践哲学の再構成を通じて、現代の行為者性の問題を捉え直すというアプローチを採用した。ヘーゲルの行為論は、独特の相互承認論によって一人称的観点と関係的自律性という二つの現代の行為者性の理論の特徴を併せ持っており、現代の議論状況を捉え直す際に有効な視座を提供できると考えた。

## 3. 研究の方法

行為者性の一人称的な側面と関係的な側面がいかなるものだとされているのかを明確にし、両者を比較することで、それぞれの理論の強みと弱みを明らかにしようとした。また、ヘーゲルの実践哲学における、承認や社会性に着目した行為者性がどのようなものであるかを、主として『精神現象学』の関連するテキストをもとに明確にすることを目指した。また、研究期間中に公開されたロバート・ブランダムの大著『信頼の精神』のうち、行為者性と承認に関する部分についての分析を行った。その上で、現代の行為者性の理論に対して、ヘーゲルの行為者性の理論から何が言えるかを論じた。

## 4. 研究成果

### (1) ヘーゲル実践哲学における行為者性

ヘーゲルの実践哲学が行為者性の概念について持ちうる意義を検討した。特に承認と疎外の2つの概念が、ヘーゲルにおける行為の理論の解明のために重要であることを明らかにした。

ヘーゲルの疎外論が行為者性の理論にとってもつ意義については、口頭発表“*Bildung, Self-Alienation, and Personal Autonomy*” (34th International Hegel Congress of the Hegel Society, 2022年9月8日、クロアチア・ザダル大学)において発表した。この発表では、ヘーゲルが『精神現象学』において、「自己疎外」を「教養形成」と同一視していることに着目し、自己の対象化による自己コントロールが自律にとって重要であるという現代の行為論の知見と、他者との関係が自律に影響を与えうるという関係的自律論の知見に照らしながら、なぜ自己疎外が教養形成と同一視されるのかを明らかにした。また、ヘーゲルにおける教養形成が、現代の哲学者ジョン・マクダウェルの教養形成概念と大きく異なることを指摘した。この発表の内容は数年以内に論文の形で公表されることが決まっている。

ヘーゲルの承認論が行為者性の理論にとってもつ意義については、研究期間中に公開されたロバート・ブランダムの大著『信頼の精神』での議論を参照しながら論じた。ブランダムはヘーゲル的な承認概念を基底に置くことによって、規範的なコミットメントの発露としての発話と行為を説明しようとしている。このブランダム議論について、「ヘーゲルはプラグマティストか? : ブランダム欲望論と承認論」(『ヘーゲル哲学研究』、(25)、pp. 10-24、2019年)、「ブランドムの「主人と奴隷」論——ヘーゲル『精神現象学』の新解釈とその哲学的意義——」(『宮崎公立大学人文学部紀要』、30(1)、pp. 1-13、2023年)「言説的实践とヘーゲル的相互承認」(『哲学』、(74)、pp. 64-75、2023年)の3つの単著論文で論じた。

## (2) 現代の行為者性の理論の研究

現代の行為者性の理論については、主に自律と行為者性の関係に焦点を定め、両者の関係を明らかにした。論文「行為者性の階層理論とアイデンティティの問題」(『宮崎公立大学人文学部紀要』、28、pp.1-12、2021年)では、行為者の自律についての「階層説」と呼ばれる、H. フランクファート、M. ブラットマン、C.コースガードの理論を検討し、それらの関係について、アイデンティティと行為者性がどう関わるかという観点から整理した。また、口頭発表「自律性と「本当の自分」」(応用哲学会第13回年次研究大会、2021年5月22日、オンライン開催)では、行為者性と自律に加え、アイデンティティと真正性の四つの概念の関係についての整理を試みた。また、口頭発表「人格的自律と自己統制の方針」(日本哲学会第82回大会、2023年5月20日、早稲田大学)では、ブラットマンの自律的行為者性の理論の難点を、S. キルミスターが提唱する自律の四次元理論に着想を得て乗り越えることを試みた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 川瀬和也	4. 巻 74
2. 論文標題 言説的实践とヘーゲルの相互承認	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 哲学	6. 最初と最後の頁 64-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川瀬和也	4. 巻 30(1)
2. 論文標題 ブランドムの「主人と奴隷」論：ヘーゲル『精神現象学』の新解釈とその哲学的意義	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宮崎公立大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川瀬和也	4. 巻 28
2. 論文標題 合理性を逸脱する精神	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ヘーゲル哲学研究	6. 最初と最後の頁 87-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川瀬和也	4. 巻 28
2. 論文標題 行為者性の階層理論とアイデンティティの問題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 宮崎公立大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1 - 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川瀬和也	4. 巻 25
2. 論文標題 ヘーゲルはプラグマティストか? : ブランダム <small>の</small> 欲望論と承認論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヘーゲル哲学研究	6. 最初と最後の頁 10-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 川瀬和也
2. 発表標題 「ブランダム <small>の</small> ヘーゲル」と規範の客観性 (学教会シンポジウム「プラグマティズムの再検討」)
3. 学会等名 日本哲学会第81回研究大会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kazuya Kawase
2. 発表標題 Bildung, Self-Alienation, and Personal Autonomy
3. 学会等名 34th International Hegel Congress of the Hegel Society (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川瀬和也
2. 発表標題 人格的自律と自己統制の方針
3. 学会等名 日本哲学会第82回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川瀬和也
2. 発表標題 自律性と「本当の自分」
3. 学会等名 応用哲学会第13回年次研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川瀬和也
2. 発表標題 自律の条件としての疎外　ヘーゲルにおける疎外と教養形成
3. 学会等名 ワークショップ　疎外　のポテンシャルを考える
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 川瀬和也
2. 発表標題 人格的自律と「本当の私」
3. 学会等名 応用哲学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川瀬和也
2. 発表標題 行為・行為者・行為者性
3. 学会等名 日本哲学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kazuya Kawase
2. 発表標題 Author Meets Critics: Character and Causation: Hume's Philosophy of Action(2019, Routledge) by Constantine Sandis; Critic1
3. 学会等名 Setouchi Philosophy Forum: Hume on Action (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------